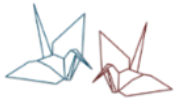


未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 7月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和8年7月1日発行



「耐性」の空洞化

先日、ネットニュースで「なぜ若者は折れやすくなったのかー教育が生む【耐性の空洞化】」という記事を読みました。親子関係専門家の安藤大作さんという方がお書きになった文章です。

日本経済新聞では、中小企業における若手社員のメンタル不調がこの10年で3倍に増え、仕事だけでなく、家庭環境や人間関係、孤立感等多様な要因が指摘されているとし、この問題は「企業の労働環境」だけで説明できるものだろうかと問うています。つまり、企業側の対策（カウンセリング体制の整備や産業医との連携、ストレスチェック、外部相談窓口の設置等「ケア」は拡充されてきた）が進んでいるのに、何故状況は改善しないのかという疑問です。

安藤さんは、もっと根本にある「教育」や「育ち方」の問題に目を向ける必要があると言います。

人は、小さい頃から理不尽なことや困難な状況を経験し、それを周囲の人と協力しながら乗り越える体験を積み重ねることで、心の耐性を育てていく。失敗しても、助けてもらいながら立ち上がった経験。仲間とぶつかりながらも、一緒に何かを成し遂げた経験。そうした積み重ねが、「また今回も乗り越えられる」という感覚につながる。しかし、近年は、そうした経験を十分に積めないまま社会へ出る若者も少なくない。（記事の一部を転載）

お読みになって、どのようなことをお感じになりますか。僕は、普段から考えていたり、皆さんにお伝えしたりしている内容と、まったく同じことが書かれていたことに、溜飲が下がる思いでした。

若者や子どもたちのそういった経験不足が、メンタル不調につながっているという主張に、確かに因果関係はあるだろうと考えます。しかし、現代の家庭教育・公教育の中で何が変わったから、そうになってしまうのかが、分からなければ問題の解決に近づくことができません。少しでも何かできるように、僕が小学生の頃と比べながら一緒に考えていきましょう。

まず、学校について見てみましょう。僕の頃は確か45人までが1クラスとなっていました。（今は35人です。）きめ細やかに担任が見るには、限界があったはず。その当時、子どもたちのトラブル等に丁寧に対応できていたかという点、難しかったのではないかと思います。先生の目に付けば、叱られたり指導されたりしましたが、当時の子どもたちは、基本、先生に「〇〇君が僕に△△

してくるので、困っています。」なんて絶対言いませんから、友だち同士のことに介入された記憶は、まるっきりありません。

また、小・中学校時代を思い出してみると、先生に怒鳴られたり、頬をはたかれたりしたこともありましたが、体罰がよいわけがありません。しかし当時の自分は、悪かったから仕方ないと思って耐えていました。

そして授業は、先生が話しているのを聞いて、ノートにまとめるというような内容が主でした。つまらなくとも、飽きてきても、じっと座っていることを求められました。それが「普通」だったのです。授業によっては、本当に苦痛だったという記憶もあります。現在の授業は、求められる力が変わった事で大きく様変わりしてきています。

また、当時の指導要領を確認してみると、授業時間数は、土曜日にも授業があったこともあり、1日平均にならすと5.1時間でした。今は、1日平均5.8時間で、約13%も増えています。放課後、子どもだけの時間の中で、様々な遊びを謳歌できました。同時にその遊びの中で、子ども同士の軋轢やいじめのようなことに対して耐えつつ、自分でそれをどうするか考え、行動していたのです。

一方、ご家庭の有り様はどうでしょうか。例えば、先生に理不尽なことを言われて母に報告したとします。母は決まって、「あんたが悪いに決まっている！」と取り合いません。こういう家庭がほとんどでした。友だちとのトラブルについても、親や先生に言うことは卑怯者のやることと捉えていた子どもは、やっぱり言わずに自分で悩み、耐えていたのです。

どうでしょう。今見てきた中に原因として考えられる内容があるでしょうか。そう、嫌なことや理不尽なことに「耐え」なければならない機会が、そして、それに対して子どもが「自分で考え、判断して、行動する」機会そのものが、なくなってきているのではないかと考えます。ご家庭では、そんな意図はないにしろ、子ども自身の問題に対して、親が解決に向けて動いてしまいがちだと感じます。「子どものため」と言いつつ、ご自分の不安を解消するための行動になってはいないのでしょうか。

ご家庭で、子どもの問題を子ども自身にしっかり「考え」させましょう。その問題に対して、自分はどうしたいのか、その思いを実現するためにどう動くか、「判断して行動」できるように支えましょう。子ども自身が自分の問題に向き合い、耐え、自分で考え判断して行動できる力を育てない限り、この問題に解決の糸口は見えないのです。